

“The Secret Sharer”における〈方位喪失〉のモチーフと船長の内面的成長
—Conradにおける現代の自我の問題、分析ノート（2）

溝口 薫

Summary

The Motif of Loss of Bearings and the Captain's Awakening
—An Analytical Note on Conrad's Modern Self (2)

Kaoru Mizoguchi

The loss of bearings is one of the key motifs in "The Secret Sharer", and the actual incidents and the related images as such suggest that all the characters in the story except Leggatt lack the internal strength inexhaustible and self-directional enough to save themselves out of the predicament. Indeed such lack is a weakness typical of the modern self accustomed to the very routinized ways of thinking.

Conrad subtly suggests that there is such a weakness in the hero-Captain too, which he overcomes only after moratorium, when he truly understands the "alive excellence" of Leggatt toward the end of the story.

Joseph Conrad (1857–1924) の “The Secret Sharer”¹⁾ は、短編ながら重い感動を引き起こす作品であるが、その大きな原因の一つは、主人公の船長が逃亡者 Leggatt をいわば「もう一人の自分」としてみなすような深い共感をもって受け入れるのみならず、そうした無条件の受容によって Leggatt の “brother’s keeper” としての役割を貫き、彼に押し付けられた “brand of Cain” を覆しその〈救済〉を成立せしめるところにある。²⁾ しかし、主人公が自らの社会的肉体的生命をかけ彼の逃亡幫助を敢行するに至ったのは、いわゆるキリスト教的な憐れみからというより、彼自身が独立的な Leggatt の生きる姿勢に共感を覚えていたからである点はみのがせない。

F.R. Leavis は、主人公と Leggatt 両者に “individual moral judgement and moral conviction that is strong and courageous enough to forget codes and to defy law and codified morality and justice”³⁾ という共通性を認め、船長に与えられた試練とは、そうした優れた精神をもった〈双子〉である Leggatt を Sephora 号船長らの機械的な法の適用から守ることができるかということであったとし、主人公が、Leggatt の思いがけない到来に際し、機敏にその試練を理解し、意志堅く実現していくところに主人公の意味深い成長があるとしている。

しかしながら、いま一度テキストにたち戻ってみるならば、確かに船長の達成した事柄として自立的な morality の確立が見逃せないことは事実ではあるのだが、全体としてみた場合、船長の成長とはいわゆる善悪判断をめぐるものだけではない事に気付く。まずこの物語は新任の船長の職業上の自己確立の物語であり、さらに Leggatt に会う以前の、船長のいささかモラトリアム状態に陥っているように思われる部分に照らしてみるならば、物語には誰しもが明らかにせねばならない人生に対する自分自身の基本姿勢に関する問題があることに気付くのである。実際船長の果たす中心的行為をとってみるならば彼は Leggatt 救援の行為を自力で順調に遂行したわけではない。実行途中遅延が生じ、のみならず、その際 Leggatt 自身に事態を切り開く方法を授けられ助けられているのである。この小論においてはその遅延の理由が、じつは以上指摘した船長の基本姿勢の問題と関係があるとみて、それが Leggatt といわば二度目の出会いを果たすことから解決に導かれて行く点を重視し、その面で達成される船長の内面的な成長を辿ってみる。この論においては特に物語の中で特徴的な〈方位喪失〉のモチーフに注目する。それはアクチュアルレベルでの海での危機的状況であると同時に同様の比喩としてもあらわれており、人物の人生に対する基本的姿勢の如何を知る指標になると思われるからである。Leggatt は唯一この危機的状況から自力で脱出する〈力〉を持った存在として現れてきており、船長はその秘密を彼から学ぶのである。

先に筆者は物語全体に埋め込まれている Leggatt 自身の物語に焦点を絞って彼の精神的所価値を明らかにした。重複を恐れず述べるならば、彼には Sephora 号船長とは対照的に、冷静で私情をまじえぬ判断を行い、その実行にあたっては定めた目的に徹して譲らない、強烈に自立、自律的で積極的な独立性が認められた。⁴⁾ Leggatt の内面的姿勢がまずは一貫するものであることは、例えば嵐における救命の戦いの場面においても、あるいは監禁と水泳、あるいは船長に発見されたときの対応そして船中での彼の態度、告白や身の処し方に明らかである。彼は船長も驚嘆している通りいかなる事態にあっても事柄、物事をみる際に私情を優先させず、いつも落ち着いている。また睡眠から覚めるとたちまち "full possession" になる。だが Leggatt は、一方で監禁、他律強制を嫌い、全身で抵抗するであろう存在として示されている。実際彼の殺人は、集中の極点で、事態を自滅へと導こうとする狂乱の暴徒に対してなされた。

ところで Conrad にはこの作品に取りかかる直前の自伝的エッセイとして *The Mirror of the Sea* があるがその一節に、いわゆる理想的な seaman について、またその持つべき技術のありようとして a fine art に達する seamanship とは何かについて定義しているところがある。いわく、seaman の職業とは詰まるところは、"To get the best and truest effect from the infinitely varying moods of sky and sea,"⁵⁾ であるのだが、そのために seaman は単に "the knowledge of the general principles of sailing" を持っているだけではだめであるという。すなわち、船については、"a precise knowledge of what she will do for you when called upon to put forth what is in her"⁶⁾ といった積極的な認識を持たねばならず、一方その技量についても失敗がないというだけ、あるいは utility のレベルに留まっているだけのそれでは不十分で、大自然の「千変万化する海の状況に機敏に対処し最善の効果を上げる」べく「その都度最高の技術を発揮するようころがける」ものであるという。またそうした "alive excellence" を保とうするなら常にそれを阻む内なる敵 "an insidious and inward decay" と戦う必要があるとする。⁷⁾ さらにその技術の実践においては、第一級の seaman は、私心があってはならず、"To forget one's self, to surrender all personal feeling in the service of that fine art, is the only way for a seaman"⁸⁾ という。

こうした「生きて優れた」姿勢とは、単に職業上の必要な心的態度というだけではない。というのは、外界の諸条件に対して自覚的積極的でありつつ同時に虚心にたちむかってゆくというこの態度は、浅薄な欲求や恐怖に流されず事態に目覚めてなお深い意欲を保つという心境であってそれこそ通常意識している以上の力を引き出せる内面のありようなのである。快樂欲求や自己保全欲求など第一次的な欲求に流され易く、危機にあっては迷妄に陥り易い慣習化した思考パタンに支配された近代の自我には達し難い境地なのである。事実、Conrad は機械化・文明化された船ではこうした理想的 seaman は育たないと述べている。それは過酷な海と直接に接触対決して鍛え上げられた自然による discipline を経た心境、心組だからである。⁹⁾ ふりかえてみれば、Leggatt の自分より大きな事柄のために己を徹して捨身するがごとく虚心に取

り組みをする姿勢がじつは、上の seaman の理想的な姿勢の肝要な部分で共通する。¹⁰⁾

Leggatt の姿勢は、Conrad の優れた船長達が多少の表面的な個性の差はあれその身に堅持しているものであることは、例えば、“Typhoon” の Macwhirr 船長や *The Shadow-Line* の船長、あるいは同じ *The Mirror of the Sea* の中に出てくる Conrad 自身の “Initiation” が語られる部分に言及されている難破した Danish brig の船長についても同様であろう。彼らは皆難事にあたって私心を交えず、事態を深くとらえその場に最善の行動を一心に実行するのである。そして彼らの優れた危機的状況に対する目覚めた姿勢の保ちようは、その堅忍不拔の気力と合わせて、人間のいかなる努力もまた達成にも無関心な「絶対的」に「無情の海」と戦う時の、決して確実ではないが己れを救う唯一の希望となる人間の力となるのである。¹¹⁾

興味深いことにこの作品には何度か闇の海あるいはこれに類するイメージが散見され、多くの人物がその中で己の位置を見失いそうになる。例えば Leggatt であるが、彼は Sefhora 号を離れた後の様子を次のように語っている。

I couldn't see any stars low down because the coast was in the way, and I couldn't see the land, either. The water was like glass. One might have been swimming in a confounded thousand-foot deep cistern with no place for scrambling out anywhere, but what I didn't like was the notion of swimming round and round like a crazed bullock before I gave out. (155)¹²⁾

しかし Leggatt はこのあと、決してその恐怖に負けることなく、また自暴自棄にも陥らず、船長の船の停泊灯を見つけるや、直ちにそれを「泳ぐ目標」にして「まっすぐに」泳いできて命を助けられるのである。この停泊灯は、Leggatt の方位の喪失の危機を救うので、船長の共感、或は受容性のシンボルであるとはよくいわれていることなのである。が、逆に、「闇の中をただぐるぐると回る」ような無意味的無自覚的運動を嫌い、応急の目標を発見し、それに向かってとにかく前進し自らの救済の可能性に挑み続ける Leggatt に即していえば、はるかに見えたであろうその白い光は、むしろ彼のよく修練された内面、方位喪失の危機を乗り越える姿勢をあらわすとも考えられないだろうか。

さてその位置喪失の危機を脱出した Leggatt と対照させて考えたいのは、猛烈な嵐の夜 Sefhora 号上で茫然自失し指揮を放棄してしまった Sefhora 号船長、並びに主人公によって行われた最終的な闇の海での冒険の際、“Lost!” と叫び続けうろたえる船長の船の第一航海士の二人である。彼らは、こうした闇のなかでのこうした自失だけでも seaman として失格者であることは明らかであるが、彼らの<方位喪失>はメタフォリックにも示され、かれらの内面の弱さを暗示する。Archbold 船長は、Leggatt を捕縛しようとやってきた船長の船で事情説明をするのだが、おそろしい嵐と連続して起きた殺人事件の経緯について順序だてて語れないばかりか、Leggatt と自分の立場と行動の意義を転倒してしまう。“bearings” (=形勢、方位) という語に引きかけて語り手はそのことを暗示し、“He had thought so much about it that he seemed completely muddled as to its bearings, but still immensely impressed” (163)) さらに Archbold 船長は自分の混乱を正直そうに告げているように見えるが、実はその告白の

真の意味は彼には見えていない皮肉をも重ねて示す。Leggatt を法の手引き渡すことで自分の責任放棄から目をそらし、Leggatt を追捕する自分を容認する彼は、いわば受身的な自己肯定の習慣のなかで道徳的にもまた現象的にも、事態を深く見てとる自覚的な把握が不能になってしまったのである。また別の第一航海士は、冒頭部で自分の部屋で、あたかも新任の船長にあてつけるかのように、自分のインク壺の中にはまって死んださそりの思いがけない侵入の由来を「自分に納得が行く」まで「いつまでも」考え続けている。が、この暗黒の井戸で溺死したさそりのイメージは皮肉にも自己満足の思考にとらわれている彼自身に重なるのである。不毛な思考の循環に甘んじている彼は貧しい自己肯定の闇で溺れているのであり、やはり現実の危機的状況に直面できない。

[iii]

ところで、〈方位喪失〉という事態に関連して主人公の船長を考えていくと、面白い事実に気づく。冒頭部で船長はシャム湾奥に停泊した船の上で、まず南方を眺め、かつ北方の陸地をのぞんであたかも光景の中に己が位置を確かめようとするかのごとく、辺りに視線を走らせている。その暗示は確実に引き継がれ、船長は誰もいない船上で、初めて航海の指揮を取る自分をその新しい全責任を負う地位と職務において、そしてもっと具体的には、船自体と気持ちの上でぴったりと一体になろうとして、〈己が位置〉を捜し求めている。ところが、必ずしも彼は成功しない。なぜか彼の「さだまらぬ目」は視界の中に船を見つけたり、星が降るようにきらめきだす夕刻の天空の変化に、あるいはにわかになしく走り回る給仕や甲板下の物音に気をとられて、彼の船との一致、己れの位置付けはままたらぬのである。またこの彼の〈方位喪失〉はさらに船上の人々との関係においても明らかになる。彼は着任後2週間になるのだが、誰も知らない船上にあって年も若く、新任であるため、周囲の人々の中でその地位が確立されていないようである。すなわち「ほおひげを“moral support”にしている」一等航海士は、主人公の語りごとごとに“Bless my soul! You don't say so!”（「まさか！」）と不信用の表明で答えるのだし、二等航海士は彼のこの無礼な態度に面食らっている主人公を心のなかで笑っているのである。そして主人公はこうしたかれらの態度の無礼さ、また無軌道に気付いていても、この時点では言葉に出して秩序を正したりはしない。さらに、彼自身、“I was somewhat of a stranger to myself”（138）と自らの自らに対する態度さえ決しかねているかのようにこぼしている。

船長のこうした位置の混乱は、まずは新しい地位に置かれた不安、不安定さから来るとも思われる。というのは船長は二度にわたって己が「全責任」を負うことの地位の novelty について心配そうに言及しているが、そのことはその責任が果たして取り切れるかという不安があることを暗示する。もっとも彼はおのが不安に手をこまねいていたわけでもない。というのは、船長は過去の航海の経験に照らして未来の航海を思い浮かべ、常識を働かせて、冷静になろうとしているからである。“I took heart from the reasonable thought that the ship was like

other ships ... and that the sea was not likely to keep any special surprises expressly for my discomfiture.” (140) また船長がこうした割り切りで不安を乗り切ろうとするのは、航行についてのみではなく乗組員との関係についてもなのである。二等航海士を除いて、一番年が若く、船長の職責は初めて担うのだから、“I was willing to take the adequacy of the others for granted. They had simply to be equal to their task.” (138) というのである。ところが、彼の安易な理屈付けによる気休めが全く覆されてしまうことは注意すべきであろう。平常通りの航海ですまないことは、Leggatt の到来においても明らかであるし、また実のところ船長を心中においては軽んじているのだから乗組員は、他と同様「仕事ができ」用を足せたとしてもそれ以上の積極的自覚が必要とされる船上では“adequate” どころではないはずである。おそらく船長が定まらぬ本当の原因とは結局、新しい境遇にあってなおこれまでと同じ考え方の延長でよしとするその常識的思考習慣に捉われていることなのではないか。既成のパタンへの依存がもはや通用しない事態が予定されている物語の中で、主人公船長は、Archbold や一等航海士ほどではないにしても、その自我の保存欲求への安易な傾倒を排し、独立的積極的な覚醒した内面を奪取すべき問題をかかえている事がわかるのである。¹³⁾

[iv]

もっとも船長の心中奥深くには彼自身も気付いていないような問題解決への潜在的な動きがあるようである。愚か者でうぬぼれた一等航海士や、勝手者で冷笑家の二等航海士が船長の遠慮をよいことに勝手な行動を見せる食卓の場面は、スリルに宙んだ物語の喜劇的な場面の1つでもあるが、そこにその動きが暗示されている。船長は最も近くに停泊している船の情報を収集しようとしているが、一等航海士は相変わらず船の正体について推測をこらす一方、二等航海士は情報を知っているのにわざと黙っていて、一等航海士の分け知りぶりやそれにつきあわされる弱気な船長の滑稽さを眺めては心の中で笑っている。そのような中、彼は突然——実は彼の中の“a stranger”が言い出したことだと語るのだが——積荷の搭載で疲れているだろうことを案じて自分から進んで当直に立つという「親切なる申し出」をし、皆を即休息につかせる指図をするのである。彼は直後に、その結果船上へ上がる縄梯子が放置されたままとなり、規律の乱れを招いたことを悔やみ、動機も目的もはっきりしないまま口をついてでてきた自分の発言が性急なものであったことを反省しているが、この突然の乗船規定を無視した unconventional な指令に、今までのやり方では駄目だという潜在的に深まりつつあった意識、既成を脱却し覚醒したいと言う願望を見ることは困難ではない。そして彼の“strangeness”こそは、結果として、Leggatt と会うことを導くのである。

さて自分を含めこの船の上においては誰も seaman としての資格を満たしておらず、頼りになるものがないという状況は、ほんの二週間前までは一等航海士であり、思いがけないときに任命された主人公にしてみれば、心中深くにおいておのが頼れるモデルを求めたくなるものであるにちがいない。その意味で Leggatt が、頃合よく出現するのであれば、彼は、船長にそ

の職務に至るための資格を教示する initiator としての役割を持たされている double と考えることは可能であろう。が同時に船長が心の片隅で求めていた新しい心境の具体的なありようであったということもまた可能だろう。かくて船長は Leggatt に共振しつつ、おのがじし Leggatt の生きた姿勢を反映実現させると考えられる。

ところがその実現は先にも触れたように簡単ではない。Leggatt を匿うようになると主人公の態度の不決定は、一見消滅したように見える。しかし彼が積極的に見えるのは、表面上であり実のところ両者の安全を確保するために、統率や命令をためらっている余裕がなくなり、権威を演出する必要に迫られたからに過ぎず、今少し意地悪な見方をすれば、Leggatt の模倣をしているにすぎないともいえる。実際 Sephora 号船長の登場で船内に逃亡者のニュースが知れわたり、船長の当初の甘いもくろみ（すなわち Leggatt を変名で客として通すこと）が挫折した後、彼は行き詰まった事態を解決するいかなる新しいアイデアも出せないのである。本当の意味で状況を担い打開を試みることをやめない Leggatt 的姿勢が確立されるには潜む怯懦を払拭し、一途にならねばならない。これ以上匿まうことが不可能という限界に達した時、船長は突如、膠着状態を解く提案を Leggatt から受けることになる。

“You must maroon me as soon as ever you can get amongst these islands off the Cambodge shore,” he went on.

“Maroon you! We are not living in a boy’s adventure tale,” I protested His scornful whispering took me up.

“We aren’t indeed! There’s nothing of a boy’s tale in this. But there’s nothing else for it. I want no more. You don’t suppose I am afraid of what can be done to me? Prison or gallows or whatever they may please. But you don’t see me coming back to explain such things to an old fellow in a wig and twelve respectable tradesmen, do you? . . . As I came at night so I shall go.”

“Impossible!” I murmured. “You can’t.”

“Can’t?— Not naked like a soul on the Day of Judgement. I shall freeze on to this sleeping suit. The Last Day is not yet—and you have understood thoroughly. Didn’t you?” I felt suddenly ashamed of myself. I may say truly that I understood—and my hesitation in letting that man swim away from my ship’s side had been a mere sham sentiment, a sort of cowardice. (180)

この箇所は船長と Leggatt の間にかわされた多くの会話のなかで一見目立たない部分なのであるが、船長にとっては一連の体験の決定的な意味を悟る epiphany が訪れる箇所である。Leggatt の “You must maroon me.” という言葉に導かれて、彼は事態を解決する最善の手段を明快に捉え、かつそうした考えや行動を生み出す内面のありよう、すなわち自己保存を省みず、事態を担いきろうとする自覚的で積極的な態度を再度確認するのである。そればかりではない。ひるがえってその姿に照らし出されて自分の現実のありようにも気づくのである。彼を「島流し」にすることなど「できない」といった時、彼は、新たに直面したそのリスクの大きい

冒険に関わることにひるみ、それをたちまち<常識>の問題にすり替えたのである。のみならず彼はこのことから、いつのまにか彼のうちに巣食っていた受身性、すなわち事態をありのままに見、深く関わることを阻む既成の習慣に依存する自分の弱さを見切ったのである。

船長は Leggatt の発言に従って、Koh-ring 島に船を近づけ、彼をその島へ逃そうとする。が、彼が漆黒の闇の中船を極限まで島に接近させることを特に彼に対する「良心の問題」としつつ、自分を含め乗組員全体の命を賭けてもなすべきこととして "Must!" と自分に言い聞かせているのは、注目すべきであろう。今や Leggatt が示唆したからその通りをするというのではなく、己が内なる要請を感じつつ行為することのこれは証の言葉だからである。船長は、巨大にみえ、被いかぶさるが如き闇の中、船を進める。島陰のあまりの暗さに再度、自分の位置を見失いかけるが、良心の要請と真の seaman たる資格を確立しようとする要請、いや、人類一般の理想としての、危機に直面してなお能動的にとりくむ己れのあり方を自覚した彼は、決してひるむことなく目をこらす。その目に映るのは Leggatt に与えたはずの自らの船長の白い帽子であった。彼は闇にあってもその行き処を知る Leggatt の生きる姿勢を継承することを達成したのである¹⁴⁾。

註)

- 1) *Harper's Magazine*, 8-9月号, 1910年発行, 後, 短編集 *'Twiixt Land and Sea*, (1912年)に所収。
- 2) Cainの烙印のreversion,あるいはinversionという船長のLeggatt 救済の役割について言及したものととしては, Daphna Erdinast-Vulcan, *Joseph Conrad and the Modern Temper*, (Oxford U. P., 1991)およびCedric Watts, "The mirror-tale: an ethico-structural analysis of Conrad's 'The Secret Sharer'", *Critical Quarterly*, vol. 19, no.3 (1977), 25-37.
- 3) F.R.Leavis, "The Secret Sharer", *Anna Karenina and Other Essays*, (Chatto & Windus, 1967), 114-5.
- 4) 溝口薫, "The Secret Sharer"におけるLeggattの精神的価値——Conradにおける現代の<自我>の問題, 分析ノート(1)——, 「神戸女学院論集」第41巻第1号, 43-51.
- 5) Joseph Conrad, "The Fine Art", *The Mirror of the Sea, Memories and Impressions*, (John Grant, 1925), 31.
- 6) *ibid.*, 27.
- 7) *ibid.*, 24. *ibid.*, 29-30.
- 8) *ibid.*, 29-30.
- 9) *ibid.*, 30-1.
- 10) ただしLeggattは、一等航海士としての身分を剥奪され船から逃亡したseamanであり, *The Mirror of the Sea*においてseamanの理想的条件としてさらに強調されているseamanの乗り組む船への厚い信頼, 愛, fidelityは認められない。しかしそれだけにLeggattは人間の窺境に立ち向かう優れたseamanを一般化する存在として考えられよう。
- 11) *ibid.*, "Initiation", 147.
- 12) "*Heart of Darkness*" and "*The Secret Sharer*" (*Bantam Books*), 155. 以下テキストはこの版により引用, 言及の箇所はページ数(155)の要領で本文中に示す。
- 13) 主人公のなかにArchbold船長や髭の一等航海士に通じる傾向と認めると, 何故彼が髭の一等航海士のことをLeggattと連動して連想するのか理解される。Leggattを彼の望ましいdoubleであるとすれば髭の一等航海士は彼の拒否したいdoubleなのである。この物語のdoubleが主人公とLeggattに限られるものでないことを示したものとしては, Louis H. Leiter "Echo Structures:

Conrad's "The Secret Sharer" *Twentieth Century Literature* vol. 5. Number 4, Jan. 1960, 161-175. また Joan E. Steiner " 'The Secret Sharer', Complexities of the Doubling Relationship" *Modern Critical Reviews* (Chelsea House, 1986)は, Conradが両者のdoubleにおいていかにこの conventionの可能性を網羅的に展開追求しているかを明らかにしている。

- 14) 船長のLeggattに与えた白い帽子は, 熱暑の中Koh-ring島をさまようであろうLeggattにあわれみを感じて与えられたものである。これが最終的には船長にその位置を知らせ, 最後の試練を切り抜けさせることともなるので, この白い帽子は船長の善根の象徴, あるいはまたLeggattの恩義のしるしとして捉えられるようにも思われる。しかしながら, Conradはそのような解釈の可能性を注意深く避けているようである。というのは, 船長は, その帽子はLeggattの頭から, 偶然「落ちた」ものであるとし, Leggattはそれに「構わず」行ってしまったと推測しているからである。しかしだからこそ, この白い帽子は主人公自身の, 自らの保身を構わず事態に対して最善を尽す目覚めた姿勢の獲得を象徴するといえるであろう。

(原稿受理1994年12月5日)